20周年を振り返って
これからのビーンズ
繋がりあえる社会を目指して

「居場所を、子どもたちに」
そんな想いが集まってスタートした20年前。

今年はビーンズふくしまの20年をあらためて振り返った1年でした。フリースクールビーンズふくしまをスタートした当時のスタッフやボランティアの皆さん、そして当時子どもたちだった卒業生の若者たちとの再会は、懐かしさを感じると共に、ビーンズふくしまが大事にしてきた想いを確認できました。

また、20周年記念式典開催に向けて中心になって取り組んでくれたのは、若手スタッフでした。ビーンズ内の繋がりを大切にしたいという想いで、様々な課題にぶつかりながらも、無事に開催することができました。

子ども若者支援からスタートしたビーンズふくしまは、この20年の間に、様々な社会課題への取り組みとして、活動を広げてきました。雇用体制の変化による経済格差、震災後に生じた問題、地域社会の繋がりの希薄さ…様々な社会背景の中で、「孤立」せざるを得ない状況が生まれ、それが、子どもたち若者たちの「生きにくさ」を生んでいる現状です。

そうした現状での、必然的な活動の広がりでした。

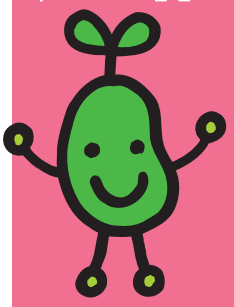
「孤立」から「つながり」へ、今それが求められているのだと思います。

ビーンズふくしまが大事にしてきた「居場所」は、子どもたち若者たちだけでなく、そこに集う多くの大人たちも繋いできました。そして、その取り組みの中で、たくさんの関係機関との繋がり（連携）も生まれました。その繋がりの中で、今のビーンズふくしまはあります。

この20年、皆さまのご協力と子どもたち若者たちに支えられてきたビーンズふくしまです。これまでのご恩をお返しするためには、ビーンズふくしまの活動を続けていくことだと思っています。「生きにくさを抱える子ども若者が、自ら望む姿で繋がることができる社会を創る」ことをこれからも目指していきます。そのためには、スタッフ一同が一丸となって「ビーンズの目指す社会」に向かっていくことが大切だと思っています。一人ひとりが力を発揮できるビーンズふくしまであることが、目指す社会を創る原点であると考えておりますので、それぞれのスタッフが情熱を絶やすことなく働けるビーンズふくしまとなっていけるよう取り組み続けます。

これまでの想いを大切にしながら、これからのビーンズふくしまの活動を進めていきたいと思っておりますので、どうぞ、これまで同様、今後とも皆さまのご理解ご協力をお願いいたします。

ビーンズ通信 vol.98



●発行日／2020年（令和2年）3月10日
●発行元
特定非営利活動法人
ビーンズふくしま

〒960-8066 福島県福島市矢剣町22-5 2F
TEL&FAX 024-563-6255
URL http://www.beans-fukushima.or.jp/
E-mail info@beans-fukushima.or.jp

NPO法人ビーンズふくしまは、不登校の子どもやひきこもりの青年などに安心できる居場所を提供し、1人1人に寄り添って、ゆるやかな社会参加を促し、その自立を支援する、若者支援の理念に基づいて事業を展開しています。

ビーンズふくしまの考える
居場所の力。

1999年、地域の子どもたちの居場所（フリースクール）としてスタートしたビーンズふくしま。その後も若者の居場所（ビーンズプレイスやユースプレイス、すきまカフェ）、仮設住宅の中の子どもの居場所、多世代交流の場（みんなの家）、子ども食堂と、地域の中に居場所をつくってきました。

「子ども若者が、自ら望む姿で生きていくことができる社会を創る」というビジョンを掲げるビーンズふくしまにとって、「居場所」は、子ども若者、そして彼らを支える大人にとっても必要なのだと考えます。

ありのままが受け入れられて、安心できる場があることで、人は「このままの自分でいい」と自信を回復し、歩くことができるのです。

ビーンズふくしまは、その居場所の力を信じながら、これからも進み続けます。

居場所の中で、今、全国的に展開している「子ども食堂」についてご紹介します。

居場所の底ヂカラ
子ども食堂 よしいだキッチン

子どもたちの居場所として

「よしいだキッチン」は、学び、遊びそして食事を通じた子どもたちの居場所として、平成30年7月に福島市吉井田学習センターにてスタートした子ども食堂です。

毎回50名程度の子どもたちと30名以上ものボランティアが集い、吉井田学習センターの協力をはじめ、地域全体で作り上げる子ども食堂になっています。

子どもたちが安心して過ごせる居場所

月1回の「よしいだキッチン」を首をなが～くして待っていたかのように、16時前から子どもたちはやってきます。宿題をやる子もいれば、プラ板づくりに熱中する子。将棋に夢中な子、鬼ごっこをして走り回る子。押し入れでかくれんぼをしたり、たまには喧嘩もしたり…（笑）。

子どもたちは本当に自由で、思い思いに過ごします。実は、最初からこんなに自由でカオスな空間（ぜひ、みなさんも一度見に来てください）だったわけではありません。いつの間にか「私たち大人が提供してあげる場」から、「子どもたち自身が過ごしやすい↘居場所」「また来たいと思える居場所」に子どもたち一人ひとりが創りあげて、今のスタイルになっていきました。

「やってみたい！」と思うことに蓋をせず、「やってみよう！」となるのが「よしいだキッチン」。約束やルールに縛られすぎず、自分で考えて、自分の想いに正直に、自分の行動を決めていく。やりたいことをやることも大事。やらないことを自分で決めることも大事。楽しい時は笑い、悔しかったら泣く。安心して人に頼ることも重要な選択。たくさんの選択を自分自身で決められる場が自分の居場所になっていき、その自己選択が子どもたちにとっての「チカラ」になっていくと思います。

地域と一緒に子どもたちの育ちを支える

子ども達と一緒に遊び、勉強を教えてくれるのは、高校生から大学生までのボランティアの皆さん。調理や食材提供は企業の皆さんや地域の方々、民生委員さん。本当に多くの人たちに支えられていると同時に、「よしいだキッチン」は地域のプラットフォームとしての役割も担っています。

地位も立場も関係なく、全員がごちゃ混ぜになってとにかく繋がりあう。「子ども支援」という一方向の関わりではなく、大人も子どもも一緒に食卓を囲んで同じ時間を過ごすという双方向の関わりが意図せず発生しています。だからこそ、子どもたちの困りごとやSOSに気づいたときに、しっかりと子どもたちに寄り添うことができます。

仲間・時間・空間。地域でどんどん失われていく「三間」がよしいだキッチンにはあって、繋がりと役割と出番がある。これこそが「地域の居場所の底ヂカラ」です。今後も学習センター、学校、保健所、社会福祉協議会、民生委員、児童委員そして学生さんや企業まで、しっかり繋がりあうことで、地域で子どもの育ちを支え見守っていきます。

まだまだ地域の中に「安心できる居場所」や「ホッとできる関係性」は残念ながら少ないのが現状です。これからも様々なかたちの居場所が日本全国にできることを心より願いつつ、笑い声と笑顔があふれる「よしいだキッチン」であり続けたいと思います。

ちょっとだけ自分らしい楽しい暮らしを見つけよう

ちょいくら

2012年から勤務している小林直輝さんは、もともと東京の事務用機器商社で働いていました。「これから何十年もこういう生活をするのか…」と、生き方に疑問があったそうです。そんなとき、3.11が起こります。被災地でボランティアを重ね、困っている人たちのために、自分の経験を活かしたい、という強い気持ちが生まれます。誰かがつくった「理想的な生き方」ではなく、少しアウトローでも誰かの役に立ちたい。生き方を哲学する小林さんが始めた「ちょいくら」。どんな想いがあって始まった活動なのか、お話を聴いてみました。

自分らしく生きる権利を守りたい

皆さんは「若者支援」と聞いたときに、どんなものを思い浮かべますか？実は意外と、若者に対する支援制度や資源は少なく、どうしても「働くこと」が目標となる支援が多いそうです。働くことにポジティブになれなかったり、既存の働き方が合わなくて、働いては辞めてを繰り返すこともあります。このような状況に対して、「変わるべきは若者だけなのか？」と小林さんは言います。

「働くことをゴールとして制度がつくられると、人の生きる権利は働くことが一番重要」とならないか。そもそも、生きていくことがこんなに大変になっている社会構造自体に問いを立てたい。そのためには、その人を形成する活動や関係性を大事にしなくちゃいけない。価値観も背景も違うから、お互いを対等に尊重して共に生きていけるように模索したい。その人が興味のあることもないことも一緒につくっていく。「してあげる」のではなく、「私」の意見も大切にしながら、一緒につくることで対等になれる。その人が歩きたい道を進みだした時に、自分の生き方が見えた気がしたそうです。

声をつくる場をつくる

20年間、ビーンズふくしまは「声を聴く場」を中心に、本人のやりたいことに寄り添う支援を行ってきました。「働く理由とか、やりたいことは何？って言われても、言葉にするのは難しい。自分と相手が対等な存在であるなら、ぼくがやりたいことを発信して、乗っかってもらうこともありなんじゃないか」と、小林さんは「声をつくる場」の必要性を感じています。「やりたいこと」が言葉になるまでには、様々なきっかけや新しい価値観に触れることも必要だからです。

「ちょいくら」は小林さんがやりたかったこと。興味を持って一緒にやってくれてもよし、やらなくてもよし。活動を通じて、他の人たちの生き方を知り、大切にしたい生き方を感じてもらえたら「選択肢」が広がるんじゃないか。そんな想いがこめられて始まった活動です。

おいしい、楽しいでつながる価値

「ちょいくら」の『福島Re:pizzaプロジェクト』は自分たちで作った野菜や、農家さんからいただいた規格外の野菜を使ってピザを作り、マルシェで販売しています。その中で、フードロスの問題を考えるきっかけがあったり、実際に販売して儲けることを楽しんだり、スローライフを味わったり、人と出会うことが嬉しくなったり。できるところから、やってみたい事から自分のペースで参加できる活動です。

そして彼らは「ちょっといいことをしている人たち」や「困っている若者」ではなく、「ピザを売っている人」です。ピザを買った人、ピザを提供した人、そこあるのは美味しいでつながる関係です。そういうきっかけで人のつながりが増えるのも面白いんじゃないかな、と小林さんは話します。

自分も含めた一人一人の違いを認めて共に生きることができる対等な社会をつくりたいからこそ、こういう活動を続けています。と言うと大袈裟に聞こえるので、とりあえずのんびりと面白いことしていきましょう、と話していました。

ビーンズアニメプロジェクト

フリースクールのOBを中心に、ビーンズ各事業のOB·OG、スタッフが自主的に集まってアニメ制作を行なってきました。

企画の立ち上げは2014年末。翌2015年明けに有志メンバーが集まり、以降月1回ペースで打ち合せを行いつつ、ストーリー、デザイン、作画など、沢山のメンバーのアイデアや力を借り、制作を進め、2016年5月に第1章を公開、その後、大小さまざまな内容変更、メンバーの入れ替わりといった紆余曲折を重ねながら、2章、3章と制作を続けてきました。

そして2019年、ビーンズふくしま20周年を前に、コミックという形で完結編を制作。これらの作品は、現在YouTubeにて公開しています。「ビーンズアニメ企画室」で検索していただければチャンネルページが見つかりますので、是非ご覧ください！！

また、作品を収録したDVDも制作しました。こちらをお求めの方は、ビーンズふくしままでお問い合わせください。(単価1000円)

ご寄付・法人会員募集のお願い

日頃より、私たちの活動にご理解を頂き感謝申し上げます。各事業を通して、多くの子どもたち、若者たち、ご家族の皆様と繋がることができております。1人1人が本来持っている力を出せるよう、寄り添い、サポートできる場所や仕組みを継続してつくっていきたいと思っています。しかし、子ども若者たちが必要としている支援が、今ある既存の制度や仕組みでは、維持することができないのが現状です。子どもたちの居場所であるフリースクールを始め、自主事業の運営は、経済的に大変苦しい状況です。

不登校の子どもたちの居場所、若者の活動の場の継続など、これからも充実した支援を届け続けるために、ご寄付のご協力をお願い申し上げます。また、私たちの活動を支えてくださる会員の募集も行っております。子ども若者支援に関心のある方がいらっしゃったら、ぜひお声をかけて頂けないでしょうか。

子どもたち、若者たちへの支援の輪を広げ、1人でも多くに支援が届くように、どうか皆様のお力をお貸しください。よろしくお願いします。

【ご寄付の方法】

銀行振込み
東邦銀行　本店営業部　普通口座 3692401
口座名義：特定非営利活動法人ビーンズふくしま　理事　若月ちよ

郵便局振込み
口座番号：02240-3-38521
加入者名：NPO 法人ビーンズふくしま

会員募集
正 会 員：年会費　1口3000円　2口から
法人総会における評決権、ビーンズ通信の発送
賛助会員：年会費　1口3000円
ビーンズ通信の発送

※なお、詳細は事務局にお問い合わせください。

●ビーンズふくしまのホームページ　こちらへアクセス → http://www.beans-fukushima.or.jp/